

令和4年度仙北市読書感想文コンクール（仙北市教育委員会主催、角館図書館後援会・（株）新潮社後援）が行われ、応募総数91点の中から仙北市長賞に小中学校の部は加藤謙さん（角館中学校2年）、高校の部は赤倉聖音さん（角館高校3年）が選ばれました。仙北市長賞の受賞作品について、それぞれ原文のままご紹介します。

# 仙北市読書感想文コンクール



令和4年度

令和4年度 仙北市読書感想文コンクール審査結果 (学校名・学年・氏名 ※敬称略)

- ◆ **小中学校の部**
  - ◆ **仙北市長賞**
    - 角館中学校 2年 加藤謙
  - ◆ **角館図書館後援会長賞**
    - 松木内小学校 3年 佐藤寧音
  - ◆ **仙北市教育長賞**
    - 西明寺小学校 1年 小田長史龍
    - 西明寺小学校 6年 佐藤瑠姫
  - ◆ **新潮文庫賞【特別賞】**
    - 西明寺中学校 2年 猪本侑来
  - ◆ **入選も受賞**
    - 西明寺小学校 2年 鈴木一耀
    - 西明寺小学校 2年 原颯介
    - 神代小学校 3年 高橋結希愛
    - 角館小学校 4年 田口徳真
    - 白岩小学校 5年 坂本結羽
    - 角館小学校 6年 小原理子
    - 神代小学校 1年 佐川愛華里
- ◆ **高校の部**
  - ◆ **仙北市長賞**
    - 角館高校 3年 赤倉聖音
  - ◆ **角館図書館後援会長賞**
    - 角館高校 3年 草薺珊瑚
  - ◆ **新潮文庫賞【特別賞】**
    - 角館高校 3年 草薺珊瑚
  - ◆ **入選**
    - 角館高校 3年 田口蓮
    - 角館高校 3年 鹿野こと美
    - 角館高校 3年 鈴木せら
    - 角館高校 3年 赤倉聖来

## 仙北市長賞 小中学校の部



「言葉の裏側にある人とその言葉」  
角館中学校2年 加藤謙

読書感想文を何の本で書こうか迷っている時に、親から一冊の本を薦められました。  
三浦しをんさんの「舟を編む」という本をです。読書感想文の課題もあり、ちょうど良いと思って読んでみることにしました。

この本のあらすじを簡単に説明すると、僕たちが普段、国語の授業などでも使っている辞書を作る側の人たちの物語です。出版社の営業部員で主人公でもある馬締光也は、とても変わっている男で、周りからは変なやつみたいでマイナスのイメージをもたれていました。しかしある時、馬締とは全くといって良い程真逆な性格の西岡という男に言葉の鋭い感性を買われ、辞書編集部という辞書を作る人たちが集まる場所に引き抜かれて物語がスタートします。馬締や西岡の他に、「辞書に人生を捧げてきた男」荒木など、個性豊かな人々が登場していきます。そんな彼らが作成している辞書

のタイトルは「大渡海」と言います。この辞書のタイトルこそが、この本のタイトルにつながっていきます。

「辞書は言葉の海だ。辞書編集部はこの言葉の海を渡っていける舟を編んでいくのだ。」

という意味で「大渡海」というタイトルの辞書であり、「舟を編む」という作品名なのです。この本、つまり「大渡海」は最終的に完成するのですが、その完成までにかかった年月は、十五年もの時間がかけられています。その十五年という長い歳月を一冊にまとめているのも、この本の魅力の一つだと思います。

辞書編集部は主に、馬締と西岡の若手二人と、荒木と松本のベテラン二人の計四人がメインとなって辞書を作っています。しかし、四人だけで辞書を作っているのではなく、その裏には支えている人たちがたくさんいて、色んな人たちの力で「大渡海」を作っていく辞書への感動を味わうことができました。

今の時代は、スマートフォンやパソコンなどのインターネットの普及から、辞書などアナログな物を使う機会はほとんど減ってきていると思います。実際、僕たちの通う学校でも、一人に一台タブレットが配られ、授業の中で、分からないことを調べたり、共有したりすることがあります。僕も

授業以外で辞書を使うかと聞かれたら、正直「いいえ」と答えました。そんな今の時代でも長い年月をかけて辞書を作っている人たちを尊敬したいと思います。何であれ、一つのことを人生を捧げるというのは、自分が心の底から意欲があり、やりがいを感じていないとやれない事だと思います。そして何より、その仕事が好きでなければいけないと思います。僕はまだ本当にやりがいを感じているものをまだ自分の中では見付けられていないと思っていますが、この物語のように、僕たちの周りには、僕たちを支えてくれている人たちがたくさんいることは知っているのです。家族だけでなく、先生方や地域の人たちに感謝して生活していきたいと思っています。

ただ、僕がこの本を読んだからといって辞書編纂の仕事に就こうとは思いません。辞書に愛着が湧いて、辞書を使う機会がこれから増えるかと言われたら、そうではないかもしれませんが、学校生活において、あつて当たり前に思っていた辞書も、誰かが長い年月をかけて努力して自分たちのために作ってくれているということに感謝したいです。これは辞書だけでなく、例えば給食や家なども誰かの努力の積み重ねによって出ています。それを忘れずに生活していきたいと思っています。

この作品は、自分が何かに打ち込んでいくことができた。強く感じることもあった。「明日が二つになった」本で一番印象に残った言葉だ。親の明日と、自分よりたくさんの方の可能性とみらいを含んだ主人公の明日がくることを表している。普通は、明日なんて二つ来ないし、時間も同じ二十四時間しか来ないが、とても素敵な言葉だ。たくさん思いが込められている。だから、使い方を間違っってはいけない。言葉は、身につけられないアクセサリのようなものだと思う。イヤリングやネックレスなどアクセサリを身につけると気持ちや華やかになる。言葉という見えないアクセサリは相手の心を暖かくする。その一つとして、「ありがとう」という言葉がある。私が好きで言葉のひとつでもある。なぜかという、相手に感謝の言葉を伝えられる魔法の言葉だからだ。しかし、好きな言葉と同時に普段親に伝えたくても伝えられない言葉でもある。伝えられないというよりは、恥ずかしくて言えないだけかもしれない。

「大好きだよ」という言葉も。たつた五文字だが言うにはとても勇気がいる。母はいつも言ってくれるのに私はほとんど言わなかった。私が十七歳の誕生日の時、なぜか母が私を抱きしめて「もう十七歳、はいね」といったときがあった。小さい時に抱きしめたときより母は、昔よりも痩せて

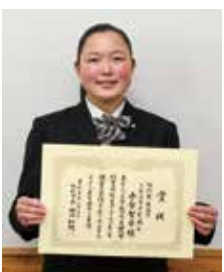
ち込んでいき努力が積み重なって、最終的に形や結果として表れた時の感動や達成感を味わうことができます。

また、言葉それ自体に真摯に向き合う馬締にも心を打たれました。それと同時に、僕自身の言葉が、今までのようなものだったかを考えるきっかけにもなりました。一つの言葉にたくさん時間と労力を割いて辞書は作られます。僕たちが何気なく使っているその場限りの類型的な言葉の連続は、実のところ言葉に厚みがないのではないかと思います。

有名な誰かが話した言葉の内容や言い方を真似するというのは、確かにその時代の流行に乗っているという点では良いことなのかもしれません。しかし、そこに僕の言葉はあるのかと考えると、単に有名な人の言葉をなぞっているだけだと思います。どんな表現や言い方をすれば相手にどう伝わるのかを考えて言葉を使っていくことは、とても難しいことです。その努力自体が言葉を上手く使う人の前提条件になるのではないかと思います。

◆ **読んだ本**  
『舟を編む』（著者 三浦しをん）

## 仙北市長賞 高校の部



「私もいつかバトンを渡したい」  
角館高校3年 赤倉 聖音

「困った。全然不幸ではないのだ。」から始まるこの本は、私にとって背中を押してくれる本であり、家庭のことで悩む人の心の支えになる一冊だ。主人公は人生で姓が何回も変わっていき、最後はひとり親家庭で育っていく。私も母子家庭で育った。だからか、共感する場面が数え切れないほどあった。

私は中学校三年生のとき、姓が変わった。受験シーズンなど色々なことが重なりたくさんの方から心配してもらった。心配の度合いと同じくらい、可哀想だという目でも見られたと思う。大変ではないのかと言われると百パーセントNOとは言えないが、料理や洗濯など今まで手伝っていた家事の量が少し多くなるだけのこと。今から、ひとり暮らしの練習だと思えばだんだん楽しくなって「次はこうしよう」「こうすれば、うまくいきそう」と思いながらやっている。たまに、洗濯のスタートボタ

ンを押さなかったりフライパンを焦がしたりしたが、それも今では良い思い出になっている。だから本の最初の言葉には、ものすごく共感した。それと同時に、「不幸はいったい誰が決めるのか」と疑問に思った。周りの人、親、いろんな人が浮かんだが、結局は自分だと思った。自分が不幸だと思う理由も人それぞれだ。お金がないから不幸だと言う人もいれば、お金はないけど充実した生活ができて幸せだと言う人もいると思う。もしかしたら、お金はあるのに不幸だという人もいるかも知れない。十人十色の人生があつて面白いと思う。しかし、不幸なのは自分が決めることであり他人に決められる必要はない。

時間を忘れるように本書を読み進めたが、中盤になってもわからなかったことがある。それは、「バトン」を表す意味だ。最初は、離婚した親をバトンで表していると思ったが、終盤の文章を読んでいると、バトンは親からの愛情を表しているという考えに行き着いた。リレーで使うバトンのように生みの親から次の親へまた親へその愛情というバトンをどこかで失わないように、減らないようにそのままでの愛情を受けることが大切だと感じた。愛情は必ず血のつながった親からもらわなければならないのか、ひとり親家庭だと愛情は減るのか、それは違うとこの本で

「明日が二つになった」本で一番印象に残った言葉だ。親の明日と、自分よりたくさんの方の可能性とみらいを含んだ主人公の明日がくることを表している。普通は、明日なんて二つ来ないし、時間も同じ二十四時間しか来ないが、とても素敵な言葉だ。たくさん思いが込められている。だから、使い方を間違っってはいけない。言葉は、身につけられないアクセサリのようなものだと思う。イヤリングやネックレスなどアクセサリを身につけると気持ちや華やかになる。言葉という見えないアクセサリは相手の心を暖かくする。その一つとして、「ありがとう」という言葉がある。私が好きで言葉のひとつでもある。なぜかという、相手に感謝の言葉を伝えられる魔法の言葉だからだ。しかし、好きな言葉と同時に普段親に伝えたくても伝えられない言葉でもある。伝えられないというよりは、恥ずかしくて言えないだけかもしれない。

「大好きだよ」という言葉も。たつた五文字だが言うにはとても勇気がいる。母はいつも言ってくれるのに私はほとんど言わなかった。私が十七歳の誕生日の時、なぜか母が私を抱きしめて「もう十七歳、はいね」といったときがあった。小さい時に抱きしめたときより母は、昔よりも痩せて

いて小さく感じて悲しくなった。しかし、抱きしめてくれたときの暖かさは忘れることができないほど覚えている。これが愛情なんだと気づくことができた。私は母からもらった愛情をいつか誰かに渡せるのだろうか。母がしてくれていることを自分もできるのか不安になる。

◆ **読んだ本**  
『舟を編む』（著者 三浦しをん）